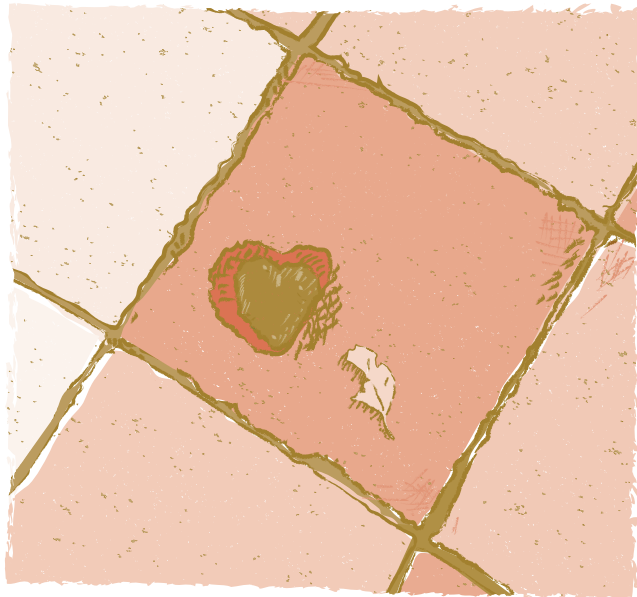




# 地救人

卒業生の今



山田 勇

Isamu Yamada

特定非営利活動法人わおん♪ 理事長

末松 泰到

Yasunori Suematsu

社会福祉法人 済生会滋賀県病院 救急外来 看護師



滋賀県立大学 OBOG Magazine  
県大の星 第6号

発行月 | 2020年2月  
発行 | 滋賀県立大学 経営企画課  
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500  
Tel.0749-28-8200 Fax.0749-28-8470

企画・制作・編集 | スパイス事業部 / 双林株式会社  
アートディレクション / デザイン | 澤田未来 (スパイス事業部 / 双林株式会社)  
取材 / 編集 | 野田大輔 (コメディアア株式会社)  
監修 | 印南比呂志 (人間文化学部生活デザイン学科教授)  
印刷 | 双林株式会社

# キャンパスは琵琶湖。 テキストは人間。

で育った卒業生に滋賀県大教育の成果を探るインタビュー集、第6回

## 地域でともに生きる人々の 生命と未来を救う。

「県大の星」。その名のとおり様々な地域や職業の最前線できらりと輝く先輩たちのインタビュー集、第6号の刊行です。

さて、「大学の地域貢献度に関する全国調査2019」の結果が発表されました。日本経済新聞社が全国755の国公私立大学を対象に行ったものです。調査は、「大学の組織・制度」、「学生・住民」、「企業・行政」、「グローバル」、「働く場としての大学」の5分野で構成されています。

滋賀県立大学は総合45位(公立大学では7位)。地域貢献の推進に向けた組織・制度面の取り組みを見る「大学の組織・制度」の評価はとくに高く、全国1位となりました(1位の大学は32大学)。これは、1995年の開学以来、「キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。」をモットーに掲げ、地域との関わりを見据えながら全学を挙げて取り組んできた教育、研究、地域貢献活動が結実したものといえそうです。「地域」こそ滋賀県立大学の学びのリソースであり、時代の変化に応じてその価値を再編し、還元していくことが卒業生の役割。

今回は「地救人」をテーマに取り上げました。看護師として救急医療の現場で人命を明日につなぐ末松 泰到さん。そして環境教育や地域コーディネートを通じて環境問題を解決し、街の活気を創出する山田 勇さん。「生命」と「未来」、地域の宝物を救い続ける二人にご登場いただき、県大力がいかに発揮されているか、お話を伺いました。



特定非営利活動法人 わおん♪  
理事長

山田 勇  
Isamu Yamada

長野県松本深志高等学校卒業  
2001年度 環境科学部環境計画学科卒業

社会福祉法人 済生会滋賀県病院  
救急外来 看護師

末松 泰到  
Yasunori Suematsu

滋賀県立水口東高等学校卒業  
2012年度 人間看護学部人間看護学科卒業

case  
01  
地救人

# 末松 泰到

社会福祉法人 済生会滋賀県病院  
救急外来 看護師

進化し続ける医療に対応できる  
学びの姿勢と研究的思考が  
滋賀県大で培った財産



## 看護師を目指すきっかけは 中学時代の社会学習



中学時代、社会人から「仕事」についての話を聞き取り、レポートにまとめる授業がありました。近くに住んでいた看護師さんを訪ねて話を伺ったところ、印象に残ったのが、「最も近い立場で患者さんと向き合う」という言葉でした。これをきっかけに医療への興味がわき、いつしか看護師を志望するようになりました。

滋賀県立大学を選んだのは、当時の成績や経済的な面への配慮もありましたが、総合大学の中にある開かれた人間看護学部というイメージに魅力を感じたからです。実際に、オープンキャンパスで見かけた学生たちはみんな楽しそうで、学部学科を越えて友だちの輪も大きく広がるだろうと期待を持ってました。

## みんなで支え合う学び、 だから続く、身につく

入学して感じたのは、想像以上に勉強が

んの言葉に寄り添うことが楽しかったため急性期医療を考えたこともあります。しかし、急性期の病院で意欲的に自分を鍛えたいと思い、自分の適性があるか不安でしたが、急性期に進路を定めました。

そのころ、現在の職場である済生会滋賀県病院がドクターヘリの導入を検討していることが話題になっていました。救急隊と現場活動を行ったり、救急隊から引き継いだ傷病者の観察と治療を行いながら、病院までの搬送を行うプレホスピタル（病院前救護）に関心があつたことから、後々はそこにも携わりたいてと考えて就職を志望しました。

## 勉強のあとは卓球で汗を流し、 交流を広げる

中高のキャリアを活かし、大学での部活は卓球部を選びました。日本学生卓球連盟4部から3部への昇格を目指していたころです。色々な学部から集まった仲間と週3回の練習をこなし、様々な大会に参加しました。

忙しいことでした。授業は高校並みに詰まっております。課題も多く、夏休みの半分は実習で過ごしました。正直に言うと、大学生活はもつとのんびりしていると思っていま

しかし、上回生になり、講義や実習の専門性が高まるにつれ、何一つ無駄がなかったことを認識するとともに、看護師に求められる職責の重さや知見の深さを痛感するようになりました。それだけに、日々の学びを血や肉に変えるには大きな努力が必要でした。実習先の患者さんと学生の立場で関わっていくには緊張を強いられる場面も少なくありません。ストレスを感じ睡眠を取りにくい状況にもなりましたが、それを支えてくれたのが学科の仲間であり、手厚く指導してくださった先生方です。

印象に残っているのは京滋戦、京都府立大学との交流戦です。実力が拮抗していたこともあり、試合はつねに白熱していたことを覚えています。

団体戦の面白さを再認識したのもこの京滋戦です。4シングル・1ダブルスなら3本、5シングル・2ダブルスなら4本をとれば勝ちとなります。勝敗を決める一戦に向かっての盛り上がりは、個人戦では考えられないほど。団体戦を経験したほうが強くなる、という定説にもうなずけます。なぜなら、誰もが持っている以上の力を発揮できるからです。これは、病院でのチームワークも同じだと改めて感じています。

## 卒業後は救急病棟勤務で アセスメント能力を磨く

今の職場に就いておおよそ7年になります。最初は24床の救急病棟に勤務しました。救急病棟は重症な患者さんから軽症で一泊入院の患者さんまで、年齢も小児から老年まで、様々な科の患者さんが入ってくる病棟です。年齢、性別、疾

## 意識の高い仲間と先生の手厚い指導 は滋賀県立大学ならではの

当時の人間看護学部の学生の男女比は58...2。圧倒的少数派でしたが、もう一人の男子学生のコミュニケーション能力が高いことも幸いして、輪が自然と広がっていききました。医療を通じて人の役に立ちたいという大きな目標を共有していましたし、もともと支え合えるの気持ちで強い学生が集まっていることもこの学部の特徴といえそうです。それぞれが早い時点で進路を明確に固めていたことも私にとっては大きな刺激となりました。自然に、自分の将来と深く向き合うようになったことを覚えていきます。

基礎学ゼミの米田先生には特別にお世話になりました。テーマは、自分の経験をもとに「学生のストレス」について設定しました。要領がよいわけではないので、研究や論文はなかなか進みませんでした。先生はつねに私のペースに合わせて一対一で指導や監修を続けてくださいました。その関係性はもちろん相手の立場や気持ちを慮る、いわばアセスメント能力こそ、看護学の基本だと改めて感じています。

## 多様な看護分野と臨地実習を通じ、 進むべき道を見つける

滋賀県立大学の人間看護学部では、大学と提携した地域の病院や保健所など数々の施設で実習を实践することが可能です。いろいろな病院や施設を見られた事は、看護師としての自分自身の適性や可能性を探るうえでも貴重な経験だったと思います。実習を経験して患者さんと関わり、患者さ

患の管理などの理由でそのまま自宅に退院できないことも多いです。

どのような助けがあれば家に帰れるか？ 帰る家には障害（段差など）はないか？ など、患者さん本人、患者さん家族と一緒に考えて整えていくことが必要です。上手く行かないことも多いですが、患者さんが望む自宅への退院に向けて調整し、喜んで退院される姿もありました。その中で意思決定支援の大切さ、退院調整の難しさややりがいを感じました。

## 2016年、救護班として 震災後の熊本に駆けつける

熊本の震災からおおよそ2週間後、救護班として現地へ赴きました。直後の混乱は収まり、交通の復旧なども進んではいきましたが、病院の壁には大きな亀裂が入っていたり、コンビニや食料品店は品薄のままだったり、爪痕の大きさを感しました。

向かったのは済生会熊本病院の慢性期病棟です。地震の影響で機能しなくなった病院から移された患者さんや避難所生活での環境変化に順応できなかつた高齢者の方など、二次被害の危機に直面していた患者さんも少なくありませんでした。そこで最善を尽くそうとしている医師や看護師の皆さんも被災者の一人。助けが必要であることを感じました。

どこに何があるのかもわからない状況からのスタートでしたが、きちんと準備をすればいつも通りに仕事ができることや応用が大切であることなど、わずか1週間でしたが、これまでの学びや現場での経験が支えになっていくことに気づきを持つる機会



2016年熊本地震の後、診療救護班として派遣された。

患が多岐にわたり、何が異常で何が正常か、迅速に判断するため勉強もたくさん必要でした。その経験が今の救急外来で行っているトリアージ（患者の重症度判定）に活かされていると感じています。緊急で入院する患者さんは、ADL（日常生活動作）の低下や疾



団体戦の面白さにはまった滋賀県立大学卓球部



## 末松 泰到

Yasunori Suematsu

略歴：

2013年、卒業とともに社会福祉法人 恩賜財団 済生会滋賀県病院へ。急性期病棟の配属となり、交通外傷やICUを出たばかりの重篤な患者の看護を経験。2016年の熊本地震では救護班として臨地。現地医療者のサポートを務める。4年目にICU・救急外来へ異動。2018年から同院保有のドクターカーにも搭乗し、医師とともに医療機関搬送前の現場などへ直接出動。7年目となる2019年4月にはICU・救急外来がそれぞれ独立した部署となり、救急外来に配属される。同年同月、研修を経て看護チームのリーダーに。



山田 勇  
特定非営利活動法人 わおん♪  
理事長

case  
02  
地 救 人

# 答えのない問題に挑み、乗り越える力 やりたいことを見つけ、 やり通す力を滋賀県大で



になりました。  
後日、米田先生のお声がけで、熊本での体験を授業の中で後輩たちに話しました。「伝える側に立つことで、学びや経験が、より深い知見に変わる」大切なことを再認識させていただきました。

**そして救急医療の現場へ**  
4年目、希望が叶いICU・救急外来へ。当時は二部署合同でしたが、2019年4月にそれぞれが独立。以後は救急外来専任で勤務しています。夜間や外来終了後に緊急で受診しにこられる患者さんの血圧や呼吸数、脈拍といったバイタルチェックを行い、患者さんの状態を的確に把握(アセスメント)した上で緊急性のレベルを判断し、必要な処置へとつなげていく仕事です。重症患者の通報に従い、医師とともにドクターカーで出勤することも少なくありません。当院ではドクターヘリも運用しており、より広域に出勤しています。今はドクターヘリナースをめざしてドクターカーで経験を積み、日々勉強しています。

同年4月からの研修を経て、現在は看護チームの一ライダーとして治療や検査の優先度決定(トリアージ)をはじめ、看護師への仕事の割り振りや後輩の支援も行っています。

## かけがえない仲間と心のゆとり、 学生時代に得た宝物

学生時代の部活仲間とは今でも交流があり、不定期での卓球練習や飲み会などを楽しんでいます。いろんな分野に進んだ仲間との交流



を通じて、それぞれの仕事の内容や、それに伴う苦労、喜び、あるいは生き方について学べることも楽しみのひとつです。それは看護の基礎となる患者さんとの信頼関係づくりやいろんな患者さんとまっすぐに向き合うための自分自身の「幅」として還元できていると考えています。もちろん、看護師になった仲間との情報共有にも努めています。

一方、よい仕事をするためには、よい休養も必要です。私の

## 成長し続けていくための強靱な基礎力を 身につける場所

救急外来は、千差万別ともいえる患者さんの状態を見極めるための判断力と、対応するための知識、迅速かつ的確な処置を行う技術、

近頃は海のルアーフィッシングにも挑戦しており、釣ったハマチを現場で絞め、持ち帰ってさばき、美味しく食べています。

場合、卓球と並ぶリフレックシユ方法が学生時代から続いているバスフィッシングです。はまりだした頃は、週5日のペースで琵琶湖へ行くこともありまし

重篤な患者さんと冷静に向き合う精神力など、看護師としての総合力が求められる仕事です。一方、進化し続ける医療技術に対応していくには、研究的な姿勢や自己研鑽が欠かせません。

学生時代に学べることや実習生として現場で経験できることには限りがあります。しかし、今日までなんとかこなしてきたこと、これからも看護師として成長し続けていけると思えること、そのバックボーンこそ滋賀県立大学での「応用の効く学び」であると確信しています。

皆さんも滋賀県立大学で本当にやりたいことを見つけてください。



123 滋賀県大時代に参加していたキンボールサークル「桃球(ももたま)」の様子

45 社会人になってから通っていた卓球場のコーチと趣味のルアーフィッシングで意気投合し、すっかり釣り仲間





学内の通称「小琵琶湖」で開催した「環境学び舎のたね」の最初のイベント、アクティビティの指導体験会の風景。参加者が指導者と受講者を兼ね、評価しあいながら進めました。



塩尻市市民交流センター  
えんぱーくにて

特定非営利活動法人 わおん♪ 理事長

山田 勇  
Isamu Yamada

略歴：

1997年、3期生として環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻（環境政策・計画学科）に入学。1998年4月から1年間、中国深圳大学に留学。2002年3月卒業。自然学校の指導者研修を終え、滋賀県湖東地域振興局が中心となって環境保全運動を元に設立された任意団体「環境フォーラム湖東」の立ち上げに参加。「みなくち子どもの森」、「栗東自然観察の森」で自然体験の指導者として働きながら、環境教育を進める「環境学び舎のたね」の活動を展開する。2008年、結婚を機にふるさと長野県塩尻市へ。NPO「わおん♪」を立ち上げ、自然体験を通じた環境教育をはじめ、地域コーディネーター事業に取り組み、今日に至る。

## 環境への関心は 科学マンガがきっかけに

環境のことが気になり始めたのは小学生の頃。学研の「科学」で読んだ、温暖化やオゾンホールに関するマンガがきっかけでした。このままでは地球が大変なことになる。その気持ちには中高生になっても変わらず、大学で勉強したいと考ええるようになりまし。

当時、国公立大学で「環境」の付く学部を持っていたのが唯一滋賀県立大学でした。理系だったので、環境生態学を体験しようと思っていました。友だちと滋賀県立大学を訪れ、キャンパスガイドを読み、環境問題とその解決について学べるのは環境計画学科だと考え、受験をしました。

## 環境問題を夢中で学び、 認識を広げるべく海外へ

講義は想像以上に面白く、夢中で勉強したことを覚えています。環境問題の解決策は、法律による規制、環境負荷を減らしていく技術の開発、そして人々の意識の改革、三つに大別できることもわかってきました。そこで、自分ができることはなにかと考えたと

の評価について。千葉や山梨、岐阜など、いくつもの自然学校を訪ねて指導者に意見を求めたり、環境教育を行っている小学校で独自の評価シートをテストしていただいたりして、その結果などをまとめて発表しました。

## 転機は4回生、 自然学校との出会い

4回生の後期から、自然学校の指導者養成講座を受講するために定期的に東京へ。期間はおよそ10か月、前半は各地で自然学校を運営している指導者の講義を受け、後半は職員として現場で実習を行います。2002年、卒業と同時に住まいを移し、東京の社団法人日本ネイチャーゲーム協会（現…公益社団法人日本シエリングネイチャー協会）でOJTを受けました。ネイチャーゲームという自然体験プログラムに携わったこともよい経験になりました。

## 環境教育に関する任意団体の 立ち上げに参加

実習終了後は滋賀に帰り、県の要請を受け任意団体「環境フォーラム湖東」を立ち上げました。在学中、環境計画学科の仁連先生に誘われ、湖東地域で環境教育を進めていくための会議に出席したことがきっかけです。

翌2003年4月から、水口町（現甲賀市）の「みなくち子どもの森」や「栗東自然観察の森」（栗東市）の臨時職員として、小中学生向けの自然体験プログラムの企画や指導に携わりました。一方で、仲間とともに「環境学び舎のたね」という環境教育の展開を目的とした団体を結成し、休日にも自然体験を中心としたイベントなどを行いました。

き、いまの学びとつながっているのは「意識を変えていくための環境教育」ではないかと思えるようになったのです。

折りしもCOP3では京都議定書が採択され、環境問題に対する社会の関心も高まっていました。熱い思いを持って地域で活動している同期や先輩も少なくありませんでした。いろんな刺激を受けるなか、環境のことを学ばずなら日本以外のことも知っておきたいと考え中国へ留学することになりました。

## 中国深圳の目まぐるしい発展が 環境教育へ進むきっかけに

父親が深圳経済特区に単身赴任していたことから深圳大学へ。当時の中国は経済開放政策を背景に劇的な成長を始めていました。例えば、裸で売られていた食品が、帰国するころには工場で自動包装を経て陳列されるようになるなど、目の前の状況がみるみる変化したことを覚えています。それに伴いゴミが増えたり、大気汚染が深刻化したり、問題も膨らみました。勢いを止めない工業化の波がもたらす環境負荷を、技術だけで解決することは困難だと思えました。やはり意識改革が不可欠。この実感が環境教育の分野へ進路を定めるきっかけとなりました。

## 校風と学友から学んだ、 問題を見つける目

帰国後は2回生からのスタートとなりました。入学同期のなかには独自の取り組みをしている学生も多く、一人はフィールドワークという授業を立ち上げました。これはフィールドワーク1・2・3の受講前に

## 結婚を機にふるさと塩尻へ、NPO法人 「わおん♪」そして「えんのわ」を設立

妻とは滋賀県大生時代からのつきあいで、「わのたね」もいっしょにやってきました。いつか故郷の塩尻で同じ仕事を続けたいと考えていたので、結婚を機に帰ることに。就職先を見つけてからNPOをつくる予定でしたが、リーマンショックの影響で募集は皆無。ならば最初から好きな仕事をやろうと立ち上げたのが「わおん♪」（2008年10月）です。設立に際して塩尻にあるNPOを調べようとしたり、NPOはあるのに詳しい情報が見つけられませんでした。そこで、環境教育だけではなく、NPOの情報を集め、発信していく地域コーディネーター事業との二本柱で仕事を進めることにしました。

設立まもなく塩尻市から受注した地域コーディネーターの委託事業をはじめ、二つの事業それぞれの専門性も次第に高まってきたので、地域コーディネーター部門を独立させ「えんのわ」というNPOを立ち上げました。こちらは妻が理事を務め、私は一メンバーとして関わっています。

## 子どもたちでつくる街 「こどもしおじり」の展開

「こどもしおじり」は、市民交流センターえんぱーくを街に見立て、こどもたちが楽しみな街や暮らし、仕事について、プロから学び、体験する、2日間のイベントです。ハローワークで仕事を探して、働いてお金を稼いだり、お金を使って買い物をしたり、税金として納めたり。例えば、会場

\*会場限定通貨…じりい



その準備となる授業を学生自身が考え、新入生に教えるというものです。学びを還元する仕組みが評価され、大学の正規の科目にもその考え方が取り入れられるようになりまし。

私が取り組んだのは「滋賀県立大学の入試を考える」ことでした。当時の環境計画学科の試験には数学や英語が含まれており、大学で環境の勉強をしようと思っっているのに、環境ではなく数学などの勉強を強いられることに疑問を感じていたので。AO入試に近い仕組みを考え、提案したことから入試制度の改善に至りました。新設大学ゆえのことかもしれませんが、この懐の深さも滋賀県立大学の魅力だと思っています。

## 自然体験を通じた 環境教育の実践に向け

就職に向け、環境教育を仕事にできる企業や団体について調べたところ、「自然学校」の存在を知りました。いろんな自然学校の見学や指導者養成講座への参加を通じ、面白さを実感。自然を大切にしなければいけないということを知識ではなく心で感じるような教え方に感銘を受けたのです。自然体験を通じた環境教育を進めたいと思うようになりまし。

卒論のテーマは「小学校における環境教育



新婚旅行は日本橋から滋賀の草津まで、1か月をかけて中山道を歩きました。妻が育った岐阜市、二人が出会った彦根、そして塩尻も通っている緑の深い道で、あちこちに新婚旅行の思い出があります。

県大時代の

# 思い出

USP  
アーカイブ  
Archive  
Vol.6



イラストレーション: GOIC 山本里士 (滋賀県出身)

## 山田 勇さんの場合



●～印象に残っている場所～  
その1  
**湖西の山に沈む夕日**  
夕暮れ時の琵琶湖によく行きました。お気に入りの風景です。

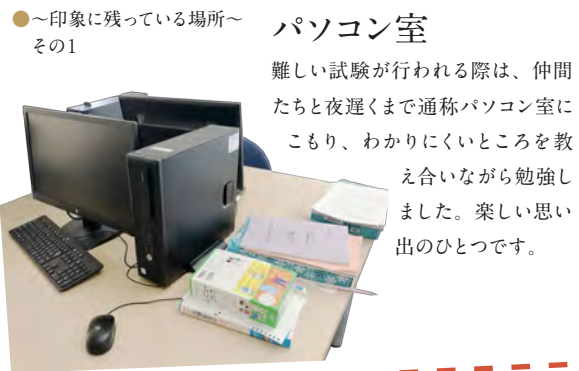
●～こだわりの一品～  
**いつも食べていた学食のから揚げ**  
美味しかったねと、今も妻と話しています。



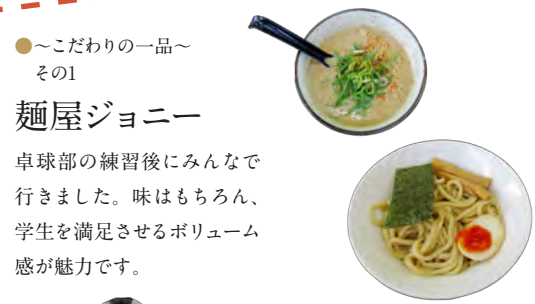
●～印象に残っている場所～  
その2  
**卓球練習場**  
小中高と卓球。結成3年目の卓球部は練習日が少なく、滋賀大学で練習したこともあります。中国から帰ってきたら人数が増え、活気が出てきました。京都府立大学との京滋戦が楽しかった思い出です。

「地教人」は卓球人だった。。

## 末松 泰到さんの場合



●～印象に残っている場所～  
その1  
**パソコン室**  
難しい試験が行われる際は、仲間たちと夜遅くまで通称パソコン室にこもり、わかりにくいところを教え合いながら勉強しました。楽しい思い出のひとつです。



●～こだわりの一品～  
その1  
**麺屋ジョニー**  
卓球部の練習後にみんなで行きました。味はもちろん、学生を満足させるボリューム感が魅力です。



●～こだわりの一品～  
その2  
**卓球シューズ**  
2回生の頃からおよそ10年使用。何度か新しいシューズは購入しましたが、なじみの良さはいちばん。体の一部になっています。



自由な校風をはじめ、40人の学生に10人の先生が対応するような手厚さもありがたく感じました。なんにでも挑戦しやすい環境だったからこそ勉強になったことがたくさんあると思います。特に環境問題には、これといった正解がありません。つねに試行錯誤を余儀なくされる世界です。そこでどんな意見を出しても否定されることはなく、そのプロセスを評価されたことで、自信を持って行動することができるようになったと感じています。志を持っている人にこそ、滋賀県立大学の門をくぐっていただきたいと考えています。



3



2



1



6



4



7



5

- 1 ドイツで行われたセブン-イレブン記念財団が実施する「環境NPOリーダー海外研修」の様子
- 2 わおん♪自然探検隊でのこどもたちの様子
- 3 塩尻玄蕃まつりで行われた浴衣コンテスト「ゆかたんびっく」で、受賞者にわおん♪所属のゆるキャラ「げんすけ」が賞状を授与
- 4 わおん♪が定期的に活動を行っている「森カフェ」の様子
- 5 市民交流センターえんば一くで開催された、こどもたちでつくる街「こどもしおじり」では街の運営のための議員や市長を選挙も行われる

## 全国の森を安らぎの場に変える「森カフェプロジェクト」

「わおん♪」の仕事のひとつがカフェのよう気楽に行ける森づくり。身近な自然のなか、たき火でいれたコーヒーを飲み、大人も子どもも一緒になってゆったりとした時間を楽しむ活動です。現在は塩尻を中心に県内数か所で展開。森カフェコディネーター養成講座を開き、全国で開催できるような体制づくりを進めているところです。セブン-イレブンの募金箱で集められた基金などを運用し、環境関係の団体に助成金を出しているセブン-イレブン記念財団などの支援をいただいたこともあります。

同記念財団では環境関係の若いリーダーを集めてドイツでの研修プログラムを実施しており、私も参加しました。大規模なNPOの

の税務署へ行けば、最初は税務署の職員さんなどのスタッフが窓口を務めますが、税務署員になったこどもたちが入ってきた時点で業務をバトンタッチ。次第にこどもたちだけで街が動きはじめます。市長や議員の選挙もあります。彼らはその後、年間5、6度会議を行い、次のこどもしおじりをどうするか、集めた税金をどう使うかといった検討を重ねます。今後は、こどもたちが実際の地域づくりにかかわれるような仕組みづくりをしていきたいと考えています。

方のお話を聞いたり、民間非営利団体による資金集めの方法を学んだりしたほか、若者がボランティアに参加する仕組みなどを教わりました。会員数の多さは票を動かす力にもつながるなど、日本と海外との違いを実感しました。

志を持った人には最適、それが滋賀県立大学

「わおん♪」での自然体験や「こどもしおじり」も、こちらは目的を伝え必要な準備を手伝うだけで、基本はこどもたちに自由に過ごしてもらっています。自分のやりたいことに挑戦できるから、達成感や自己肯定感もより大きくなるはず。ここは県大流といえるかもしれません。

「わおん♪」での自然体験や「こどもしおじり」も、こちらは目的を伝え必要な準備を手伝うだけで、基本はこどもたちに自由に過ごしてもらっています。自分のやりたいことに挑戦できるから、達成感や自己肯定感もより大きくなるはず。ここは県大流といえるかもしれません。

